昭島礼拝 2020/3/22

聖書：マルコ 12:28-37
主題：最も大切な戒め
賛美：

みなさん、おはようございます。今日はマルコの福音書 12 章を開いて頂きました。受難週、イースターまでの日数調整のため 11 章を飛ばしてしまいました。11 章と 12 章ではお話が続いていますので、今日は 11 章にも少し触れながら、12 章を見てまいりたいと思います。よろしくお願いします。今年のイースターは 4/12 です。今は、新型コロナウイルスの影響で先の見通しが立ちづらい状況ですが、このような時だからこそ、神様に信頼して歩みたいと思います。今年の標語聖句の通り、神様が不思議な力ある御手をもって、私たちを助けて下さるように、お祈りいたしましょう。今日の説教の結論を先取りする形にはなりますが、主に信頼することこそ、すべてにおいて一番大切なことです。

先週、マルコの福音書 10 章では、イエス様と弟子たちはエルサレムに向かうというお話を見ました。イエス様の地上でのご生涯は約 3 年半と言われています。その間、イエス様は毎年、祭りの時期になるとエルサレムに行かれていました。他の福音書を見ますと、その時の様子が記されていますが、マルコの福音書はあえて記していません。イエス様が最後にエルサレムを訪れた時のことだけ記録しています。これはおそらく緊張感を出すためです。イエス様はおもに、ガリラヤの地域で活動されていました。イエス様がエルサレムに行かれるというのは特別な時だけで、一番特別な時は十字架と復活の時です。ですからマルコの福音書のイメージでは、「エルサレムに行く＝十字架に向かう」となります。この緊張感を出すために、マルコはあえてイエス様がエルサレムに行かれた記事を一回しか記録しなかったのだと思います。

エルサレムの町に到着した時、イエス様はロバの子に乗って町にはいられました。これは旧約聖書のゼカリヤ書 9:9 にある御言葉が成就するためでいた。「娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って。(ゼカリヤ 9:9)」普通、王様は威厳を示すため、力強さを示すために、馬に乗ります。それも戦いで恐れずに敵に立ち向かうことのできる軍馬に乗ります。しかしイエス様は柔和な方、平和の君なので、荷車を引くロバに乗って町に入られました。人々はゼカリヤ書の預言を知っていましたので、エルサレムの町に神様が送られた救い主、王様が来られたと大歓迎をしました。

エルサレムに入られてからイエス様は、エルサレムの学者たちと律法について議論をします。ガリラヤでも多くの人に神様のことを教えられました。しかしガリラヤは当時のイスラエルでは田舎で、ガリラヤに律法の詳しい人がいるはずがないと思われていました。そのガリラヤから出てきたイエス様は当時最高峰の学者たちが集っていたエルサレムで、学者たちと律法について議論したのです。エルサレムの学者たちもガリラヤでは少々噂になっていたイエスなど、エルサレムの学者たちの間では通用するはずがないと思っていたのでしょう。今日は議論の内容について詳しくは触れませんが、12:13-17 では「ローマに税金を納めることについて」そして 12:18-27 では「七人の兄弟たちと結婚した妻について」パリサイ人とサドカイ人たちと議論をしています。

イエス様は彼らの質問に対して見事にお答えになっています。そしてかれらについてこう仰っています。『イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、聖書も神の力も知らないので、そのために思い違いをしているのではありませんか。」』学者たちがイエス様に投げかけた質問は、当時どれも解釈が難しいと言われていた議論だったに違いありません。いわゆる賛否両論あった問題につい

てです。それらについて、イエス様は間髪入れずにお応えになりました。逆にイエス様は学者たちが聖書について根本的な部分、大原則を思い違いしているので、問題がややこしくなっていると仰ったのです。

では聖書の大原則とは何でしょう。それが現れているのが、今日読んで頂いた聖書箇所になります。イエス様とパリサイ人、サドカイ人の議論を聞いていて、イエス様に感銘を受けた学者がイエス様に質問をします。「イエス様。すべての中で一番大切な戒めは何ですか？」この律法学者は純粋に聖書の教えをちゃんと理解したい、知りたいと思ったのでしょう。イエス様は答えられます。「すべての中で」と律法学者が質問したことを受けて、イエス様は聖書全体をまとめる神様の教えはこれですとまとめられたと言ってもいいでしょう。マルコ 12:29-31 を読みます。『イエスは答えられた。「第一の戒めはこれです。『聞け、イスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一である。 30　あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』 31　第二の戒めはこれです。『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。』これらよりも重要な命令は、ほかにありません。」』イエス様は第一の戒め、第二の戒めと二つ仰っていますが、できればセットで覚えたいですね。この二つの戒めはどちらも同じように大切で、お互いに切っても切り離せない関係にあります。一つ目は簡単に言えば神を愛すること。二つ目は人を愛することです。まとめると神を愛し、人を愛することです。

イエス様が仰った一つ目の「聞け、イスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一である。あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」という御言葉は旧約聖書申命記 6:4-5 から引用されています。ここには神様がただお一人であること、そしてその神様を私たちの全存在をもって愛するようにと教えられています。イエス様が二つ目に仰った「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。」は旧約聖書レビ記 19:18 にあります。「あなたの隣人」とは、あなたの周りにいるすべての人という意味です。敵、味方関係なく、関わり合ったすべての人という意味ですね。彼らを自分自身のように愛しなさいという意味になります。神を愛する、人を愛する、それが聖書の中で最も大切な戒めですとイエス様は仰いました。この戒めを基に、その他すべての細かい規定があると言ってもいいのかもしれません。特に二つ目の戒めについてローマ 13:10 はこのように書いています。「愛は隣人に対して悪を行いません。それゆえ、愛は律法の要求を満たすものです。」神様に対して、人に対して愛をもって接すること、それが神様が私たちに教えたい最も大切なことです。だから神を愛し、人を愛することを追い求めて行けば、律法を全うする事ができるのです。イエス様は聖書の全ての教えを愛に集約されました。

イエス様がこのように話された後、質問をした律法学者は言います。マルコ 12:32-33 です。『律法学者はイエスに言った。「先生、そのとおりです。主は唯一であって、そのほかに主はいない、とあなたが言われたことは、まさにそのとおりです。 33　そして、心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして主を愛すること、また、隣人を自分自身のように愛することは、どんな全焼のささげ物やいけにえよりもはるかにすぐれています。」』律法学者はイエス様の答えに賛同しました。もしかしたらこの律法学者が聖書を研究するうちにたどり着いた一つの答えと同じだったのかもしれませんね。いやむしろ、律法学者が漠然とこうなんではなかろうかと思っていたことが、イエス様の言葉によって明確にされたということかもしれません。いずれにしても律法学者はイエス様からこの教えを聞いて良かったと思ったと思います。そしてイエス様が律法学者の質問に旧約聖書の引用で答えたように、律法学者も旧約聖書で応えています。神様がいけにえよりも神様に聞き従うこと、神を愛し、人を愛することを喜ばれるという御言葉ですね。この言葉は旧約聖書のいろいろな場所(I サムエル 15:22、詩篇 40:6、ミカ 6:6-8)にありますが、ホセア 6:6 を読みたいと思います。

「わたしが喜びとするのは真実の愛。いけにえではない。全焼のささげ物よりむしろ、神を知ることである。(ホセア 6:6)」私たちは神様にいろいろな捧げ物をする事ができます。奉仕もそうですし、献金もそうです。聖書にはいけにえも捧げ物として挙げられています。その中でも神様が一番喜んでくださるのは、私たちが神様に従い、神を愛し、人を愛することです。松坂牛の特上霜降りステーキよりも、神を愛し、人を愛することの方が神様にとってはとてもうれしい事なのです。

律法学者がこのように応えたのを見て、イエス様もこの律法学者を認めたようですね。「彼が賢く答えた」とお認めになっています。そしてこのように言われました。「あなたは神の国から遠くない。」この言葉、誉め言葉は誉め言葉なんでしょうが、何か引っかかりますね。確かに律法学者がちゃんと聖書を理解していることはお認めになっているようですが、まだ何か足りないかのような言い方です。何が足りないのでしょう。そこでマルコの福音書はもう一つのお話を記録しています。それは 12:35-37 のお話です。そこでイエス様はダビデの子キリストという称号について、疑問を投げかけています。イエス様が言いたいのはこういう事です。人々はキリスト＝救い主はダビデの子孫として生まれると考えている。確かにキリストは肉体としてはダビデの子孫として生まれてきます。しかしだからといってダビデの方が年長者で偉いわけではなく、ダビデもキリストを自分の主として認めているという事です。ダビデもキリストの救いを必要としている。ダビデは自分で自分の義を建てることは出来ません。ダビデもキリストによって救われなければならないのです。つまり歴史上のどの優れた人物を取り上げて見ても、すべての人はキリストを救い主として認める必要があるという事です。つまり律法学者に足りないもう一つは自分の救い主を認めるという事です。神を愛し、人を愛する生活は自分だけで達成できるものではなく、救い主を認め、罪を赦して頂いて、救い主の愛を受け取った時、初めてできることなのです。律法学者は聖書の教えが神を愛し、人を愛することだと理解できました。そしてあともう一つ、必要な事は、その生活をするためには私たちには救い主が必要であるということです。主に信頼し、主が私たちを救って下さると信じること、それが聖書で最も重要な真理です。

ズレている議論
　エルサレム入城
　エルサレムの学者たちと議論 11:15～
　パリサイ人たちとイエス様の議論
　イエス様の受け答え
　パリサイ人、律法学者たちは神様の意図通りに聖書を読んでいない
聖書の根本 12:28-34
　律法で最も大切な戒め
　　神を愛し、人を愛する
　神の国から遠くない
　ダビデの主であるキリスト 12:35-37
　　キリストを信じること